

留学生センターの評価をめぐって

留学生センター 大 嶋 眞 紀

留学生センターは発足して三年を経過し、現在、センターの三部門、すなわち日本語研修コース、日本語一般コース、相談指導部門について評価をとりまとめている段階である。

全国的にも、大学の研究教育活動は「評価」の大波が押し寄せている状況下であり、このことは長い間、大学やその他の大きな組織が利用者の立場から捉えられずにすんできたことの反動でもある。またポストモダニズムやカルチュラル・スタディーズなどの学問的背景もあり、従来権威あるものとされたきたシステムが利用者の立場から「評価」の対象となる時代に突入したと考えられる。

留学生センターも小さな組織ではあるが、その荒波は避けられないと当初から判断し、またそのような否定的受けとめばかりでなく、むしろ「評価」の結果を現実的な所産として、センターの運営に反映したいとも考えてきた。

それゆえ、日本語研修コースに於いては、発足当初から学習者による授業評価を、学期半ば、学期末ごとに実施し、また平成13年度からは学期半ばに授業を一定期間公開し、指導教官のみならず外部からも見学者を募り、「第三者評価」に準ずる手法を採用してきた。ここで「準ずる」という表現をするのは、昨今実施されている「外部評価」や「第三者評価」はあらかじめ評価者を指定し、専門的な見地から「評価」を下してもらう手法をとっているのが一般的であるのにひきかえ、留学生センターではむしろアトランダムに見学者を招き、必ずしも専門的な見地からではない、いわば「普通の視点からの評価」をお願いしているためである。その是非はもちろん議論の余地はあるが、日本語を習得するという領域ゆえ、あるいはこのようなやり方も意味があるかと考え、実施している次第である。

平成14年度からは日本語一般コースでも学習者による授業評価を実施している。また相談指導部門では、オリエンテーション、多国籍合宿など活動ごとに参加者からのアンケートによる「評価」を収集してきたが、これらの部門での「評価」のあり方は今後も検討を重ねていかなければならないと思われる。

その他、センター全体の教育研究活動の評価については、今後、さらに多様な形態で実施していく予定である。

2002年度日本語一般コースの授業評価

2002年前期・後期の学生による授業評価は5段階評価で18問にとどめた。それでも4ページにわたり、各クラスとも回答もれも少なからず、授業評価の難しさを感じさせられた。その原因の一つとして考えられるのは、昨今、FDの発達によりいたるところでこうした評価が実施されていることがあげられる。センターの日本語クラスだけでも各クラスごとに行っているため、例えば4科目受講している留学生は4回、計16ページ分回答しなければならない計算になる。英語も並記し、読み仮名もふってあるとはいえ、日本語の不自由な留学生にとって負担は少なくない。

以下に質問内容およびこれらの質問について5段階評価を行った結果を、前・後期各クラスごとの平均値として示し、その分析を記載する。なお本報告では、18問中、質問14から質問18については各担当教官についての個人評価を行っており、その部分については本報告には含めないものとする。また、水産学研究科に於いても、日本語関連科目が二つ開講されており、授業評価もクラスごとに実施することもあるが、今回は都合により本報告書には含めていない。

[質問内容]

- 1 あなたはこの授業によく出席しましたか。
- 2 あなたはこの授業でたくさん勉強しましたか。
- 3 授業でおぼえたことばを毎日の生活で使えるようになりましたか。
- 4 日本の文化や日本人についてよく理解できるようになりましたか。
- 5 授業のスピードはどうでしたか。
- 6 学習量はどうでしたか。
- 7 クラスの学生数はどうでしたか。
- 8 一週間の授業時間数はどうでしたか。
- 9 クラスの規則や成績のつけ方についての説明はどうでしたか。
- 10 このクラスの教材は全体としてどうでしたか。
- 11 このクラスの教え方は全体としてどうでしたか。
- 12 テストのやり方や宿題、レポートの直し方は全体としてどうでしたか。
- 13 この授業は全体としてどうでしたか。
- 14 先生は教える知識と能力が十分にありましたか。
- 15 先生の話し方はわかりやすかったですか。
- 16 質問への答え方はどうでしたか。
- 17 先生の教えることに対する熱意はどうでしたか。
- 18 先生は教えるのを楽しんでいましたか。

[2002年度前期日本語一般コース集計結果]

質問 クラス名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
初級 1	4	4.5	4	4.4	3.5	4.4	4.5	4.4	3.9	4.6	4.6	4.5	4.3
初級 2	4.6	4	4	3.4	2.8	4.4	3.8	4.6	4.4	4.6	4	4	4
初級 3	4	4	4.3	3.8	3.1	4.1	4.1	4.5	4.6	4	4.4	4.1	4
漢字 1	4.5	4.3	3.7	3.5	3.7	4.2	4.2	4.7	4.6	4.8	4.5	4.7	4.7
初級作文	5	4	5	4	3	4	4.5	3.5	5	4	4.5	4	4
中級会話 1	4.5	3.5	4	4	3.5	3.5	4	3.5	4.5	4.5	4	4	4.5
非漢字圏読解 1	3.5	3.7	4.2	4.2	3	3.5	3.7	4	4.3	4.5	4	4.2	4
漢字圏読解 1	3.7	4.2	3.7	3.5	2.5	3.5	3.7	2.5	4	4.2	5	4.7	4.5
中級作文 1	4.3	4	4.3	4.3	4	4.3	4	3.3	4.6	3.6	4	4.3	4.3
漢字圏会話中級	4.6	4.6	4.5	4.8	3	3.1	3.1	4	4.6	4.8	5	4.8	4.8
中級会話 2	4.2	4.1	4.4	4.5	3.1	4.4	3	3.8	4.4	4.5	4.5	4.3	4.5
非漢字圏読解 2	3.2	3.5	4	4.2	4	3.7	3.2	3.5	4.2	4	4.5	4.2	4.5
漢字圏読解 2	3.6	3.8	3.8	4.4	3.2	4.2	3.4	4	4	4.2	4.4	4	4.4
中級作文 2	3.3	3.5	3.3	3.6	3.3	3.3	3.3	3.3	3.8	3.5	4	4	4.1
科学技術日本語	4.5	4.2	3.8	*	3.5	4.2	4.5	3.6	4.1	4.8	4.5	4.4	4.2
日本語 I	4.7	4	3.6	4.2	3	3.5	3.4	4	3.8	3.6	4.1	3.9	4.2
日本語 II	4.7	4.5	3.7	3.9	3	3.9	4	3.8	4.3	3.7	3.6	3.7	3.8
日本事情 A 文系	4.3	4.2	3.8	4.2	3.1	4.2	4.1	3.5	3.8	4.7	4.5	4	4.7
日本事情 A 理系	3.4	3.6	3.6	3.9	3.1	3.5	3.5	3.6	4.1	4.1	4	4.1	4.1
日本事情 C	4.5	4	4	4	3.4	4	3.8	3.6	4.2	4.3	4.3	4.1	4.4
桜が丘初中級	4.4	3.6	4.6	4.4	3.2	4	4	4.2	4.2	4	4.6	4.2	4.6
桜が丘日本事情	3.6	3.6	4.1	3.5	3.3	3.7	3.7	3.1	3.8	4.5	4.6	4.7	4.5

(分析結果)

設問 1 「あなたはこの授業によく出席しましたか」:回答者数が1桁、あるいは5名以下のクラスも多いが、実際の受講者数は1.2倍から1.5倍近いのが実態である（受講者数等については本報告書の「日本語一般コース報告」を参照のこと）。授業評価を実施するのは通常学期末という事情もあり、出席者がふだんよりは少なめであったと考えられる。日本語科目の大半は選択科目であり、また単位取得を目的としていない。必修指定科目（共通教育日本語関連科目）は出席率が良好であるが、選択科目、あるいは単位なしの科目の場合、実験や学部等で開講される不規則な集中講義との競合により、出席率が下がるのが実態であるが、担当者は出席者の確保に苦慮している。

設問 2 「あなたはこの授業でたくさん勉強しましたか」:回答が「3」以下の場合、学生自身が怠けたことにより十分勉強しなかったのか、また授業の構成が十分に勉強させるようにできていな

かったのか、解釈の可能性を残している。実験やアルバイトに追われる学習者の生活環境を考慮するあまり、宿題などを手控える場合もある。

設問3「授業でおぼえたことばを毎日の生活で使えるようになりましたか」：上の設問2と同様、回答が「3」以下の場合、学生自身の努力不足か、授業で導入することばが必ずしも日常の使用に即していないか、解釈の可能性を残す。

設問4「日本の文化や日本人についてよく理解できるようになりましたか」：この設問も日本語習得を主目的としたクラスに於いては、間接的な問いであるが、重要と考え、あえて評価項目とした。その理由については「留学生センター報告書2000-2002」をご笑覧いただきたい。なお「科学技術日本語*」ではこの質問を課していない。

設問5「授業のスピードはどうでしたか」：この質問では「3」が「ちょうどよい」、「5」は「はやすぎる」という否定的な評価で、表全体の設問との整合性が欠けており、今後改善の余地がある。全体的には「ちょうどよい」と回答した者が多いが、たまに「早すぎる」という回答もあり、学生の日本語力との調整が難しい。全体的には「3~3.9」の回答が22クラス中18クラスと良好な状態である。中に「2」段階のクラスが2クラスあるが、進度が遅すぎる、あるいは学習者間にレベル差があるために進度が落ちるなどという記述もみられる。

設問6「学習量はどうでしたか」：「まあよかった」（4以上）と回答したクラスが22クラス中12クラス。学習量そのものについては、実験等との競合があるとはいえ、日本語能力を強化するためにはある程度の勉強量が必要であり、担当者は量的調整に苦慮している。設問2との区分を明確にする必要がある。

設問7「クラスの学生数はどうでしたか」：「まあよかった」（4以上）が、22クラス中10クラス。日本語クラスは一般的に少人数であり、回答に大きな偏りはない。学生数について評価が低い場合はレベル差のある学生を含んでいるという問題が潜在していることが多い。その点について学習者は「学生数が適正ではない」と受けとめるようである。

設問8「一週間の授業時間数はどうでしたか」：初級1~3のクラスの評価が高いのが目立っている。3~5日開講されているクラスである。それ以外は1~2日開講されるクラスが多く、時にもっと増やしてほしいという要望なども出されるが、過去何度かそれに対応して授業時間を増やすと受講者数は期待以下にとどまるなどの事例もあり、即断はできない。

設問9「クラスの規則や成績のつけ方についての説明はどうでしたか」：質問の趣旨は学習者の取り扱いに関するもので、学期はじめに行う説明についてどの程度記憶しているか、あるいはシラバスに記載しているかが問われている。一般コースでは全体として説明等は行き届いていると判断している。

設問10「このクラスの教材は全体としてよかったですか」：22クラス中「4」以上が18クラスある。現在使用中の教材は一応肯定的に受けとめられていると判断できる。なお、表中のクラスの中には複数レベル開講されているものもあり、数字はその平均値となっている。科学技術日本語(*)では質問内容が異なる。

設問11「このクラスの教え方は全体としてよかったですか」：授業方法についてたずねており、ほぼ4以上の評価を得ている。

設問12「テストのやり方や宿題、レポートの直し方は全体としてよかったですか」：これも学習者の取り扱いに関する質問である。全般に評価は高い。

設問13「この授業は全体としてどうでしたか」：総合評価である。総じて4～5の高い評価を得ていると判断できる。ほとんどのクラスが「4」以上の平均評価を受けていることは、留学生センターで現在開講している一般コースの総合評価が高いレベルにあると考えてもよいのではないかとと思われる。

[2002年度後期日本語一般コース授業評価結果]

質問 クラス名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
初級1	4	4.1	4.1	4.1	3.3	3.7	4.4	4	4.7	4.8	4.8	4.8	4.6
初級2	3.9	4.1	4.4	4.1	3.5	4.4	4	4.6	4.7	4.8	4.9	4.7	4.9
初級会話	4.2	3.6	4.8	4.8	3.2	4.2	2.8	2.8	4.2	4.2	4.6	4.6	4.6
漢字1	4.1	4.5	4.2	3.9	4.2	3.7	4.3	4.0	4.0	3.9	3.8	4.0	4.2
初級作文	4.8	4.6	4.3	4.2	3.5	3.8	3.1	2.8	4.2	4.5	4.5	4.8	4.8
中級会話1	3.7	3.6	3.8	4.2	3.3	4.3	2.8	3.7	4.2	4.3	4.6	4.5	4.5
非漢字圏読解1	4.2	3.5	4	4	3	4.5	4.5	2	4.5	4	4.7	4	4.2
中級作文1	5	2	4	4	3	4	4	2	4	4	4	4	4
中級会話2	3.6	3.7	4.5	4.2	3.7	4.2	4	4.2	4.7	4.5	4.5	4.5	4.2
漢字圏読解2	4.2	3.7	3.7	4.5	3.5	4	4	4	4	3.2	4	4	4
中級作文2	4.5	3.5	4.5	5	4	4.5	5	3.5	5	4.5	5	5	5
日本語Ⅲ	4.3	3.9	3.3	3.6	3	3.5	3.9	3.6	4	3.7	4	4	4.2
日本語Ⅳ	4.3	4.1	4	4	3.3	4.2	4	4.1	4.3	4.6	4.4	4.4	4.5
日本事情B	4.4	4	3.8	4.4	3.4	3.9	3.6	3.8	4.3	4	4.3	4.4	4.4
桜が丘中級	4.2	4	4.2	4	2.7	4	3.2	2.5	3.5	4.7	4.2	4	4.5
設問ごとの平均値	4.2	3.7	4.1	4.2	3.3	4.0	3.8	3.4	4.2	4.2	4.4	4.3	4.4

(注)

- 1 科学技術日本語クラスは設問内容が異なるため、集計から除外した。
- 2 日本事情Bは文系・理系合わせた平均値である。
- 3 日本語Ⅲはa b cの三つのレベル別クラスに分かれているが、aは論文作成を主眼としており、設問内容が異なるため除外。b cの平均値を示した。
- 4 日本語Ⅳも二つのクラスの平均値である。

[分析結果]

設問ごとの平均値を検討すると、以下の点が明らかである。

設問1「あなたは授業によく出席しましたか」は、平均値が4.2と高く、全体に出席状況は良好であると見えるが、実際は主観的な問いであり、また最後の授業評価の時点まで出席している学生が回答していることもあり、数値は高くなっている。日本語一般コースは単位を取得できない授業が大半であり、途中で脱落する者も少なくない。それらのデータについては本報告書の「日本語一般コース報告」をご照覧いただきたい。上記クラスの中には回答者が1～2名のものもあり、この数値をもって出席状況が良好であると即断はできない。

設問2「あなたはこの授業でたくさん勉強しましたか」は平均値は3.7で必ずしも高くない。また設問6「学習量はどうでしたか」の平均値が4.0であることを合わせて考えると、課された学習量への評価は高いが、自分自身の学習量への主観的評価はそれに比して多少劣るということがいえる。これは留学生が実験、アルバイト等に追われ、宿題等を十全には果たしていない状況が伺われる。

設問3「授業でおぼえたことばを毎日の生活で使えるようになりましたか」と設問4「日本の文化や日本人についてよく理解できるようになりましたか」はともに5段階評価の4を越えており、一応基準を満たしていると思われる。

上記設問中、設問5のみは「授業のスピードはどうでしたか」という内容で、最高値は3の「ふつう」つまり「ちょうどよい」の意味であり、5は「はやい」1は「おそい」で、他の設問の数値とは意味が異なるため、今後の授業評価では修正する予定である。

設問7「クラスの学生数はどうでしたか」と設問8「一週間の授業時間数はどうでしたか」の数値が4以下で相対的に低い。この点については自由記述の部分を見ると、初級後半から中級前半のクラスでレベル差のある学習者が混在していることへの不満なども一部みられた。また学習者が多すぎると感じているのか、少なすぎると感じているのかが設問からは読みとれない文面になっている点、改良の余地がある。学習時間については、一般に評判の高い授業は少なすぎると捉える傾向は認められる。またそのような要望を直接耳にすることもあるが、その声を反映して授業時間数を増やしても必ずしも学習者が増えるわけでもないという現象も過去数回経験済みである。

残りの設問9「クラスの規則や成績のつけ方についての説明はどうでしたか」設問10「このクラスの教材は全体としてよかったですか」設問11「このクラスの教え方は全体としてよかったですか」設問12「テストのやり方や宿題、レポートの直し方は全体としてよかったですか」など、どの設問も4.0以上の評価を得ており、最終的には最後の設問13「この授業は全体としてどうでしたか」が4.4の平均値を得ているということは、留学生センターの一般コースの授業が総体としては高く評価されていると考えてよいと思われる。

ただ、留学生センターの授業評価活動は研修コースも含めると、すでに3年間実施してきているが、当初の頃と比べて明らかに変化が見られる現象が一つある。それは学習者の回答の自由記述部分が、授業評価を繰り返すごとに、少なくなっている点である。数値的な評価は一定していて、むしろ高い数値を保っていると思われるが、授業評価をはじめた頃は学習者が単に質問項目について

(大変よい)(わるい)などとマークするだけでなく、空欄にたくさんのコメントを記入したものだったが、日本語のみならず、学内のあちこちのプログラムでも絶えず授業評価が行われるようになると、一種の「評価疲れ」が見られるのではないかと思われる。こうした点を考慮して、今後の「授業評価」のあり方、手法を改良していきたいと考えている。

以上が2002年度の授業評価のあらましであるが、もちろん細部においてはまだ授業改善の余地は残されている。また、各クラスの受講者数の増加や安定的な出席を確保するためには、授業改善のみならず、日本語教育の必要性が全学的により認知され、また各学部にもまたがる時間割上の制約がある程度、規制あるいは整理されないと、留学生は出席したくても出席できないという状況は今後も続くと考えられる。

さらには、留学生の学術論文は英語化が進んでいる国際的な状況の中で、日本語学習の意義を再確認する必要もあると思われる。英語支配の世界的状況の中で、日本語をはじめとする各国語のアイデンティティが問われているといっても過言ではない。

授業評価に焦点を戻すならば、学期ごとの授業評価は留学生にとっても集計する側にとっても煩雑になりかねず、またマンネリ化する兆候はすでに見られている。今後はより多様な形式での授業評価を実施していくことも視野におさめておく必要があると考える。